

## 『笑って、笑わせて北海道を幸せの大地に』

北海道の落語家 笑生 十八番(しょうせい・おはこ)  
 [本名：原 正 (はら・まさし)]



**略歴:** 1951年島根県松江市生まれ、1970年島根県立松江南高等学校卒業、1976年北海道大学水産学部水産化学科卒業、1976年東芝情報機器入社、1997年有限会社チューリッププリンセス設立。現在に至る。2010年札幌市立大通高校特別講師、酪農学園大学特別講師。  
 毎月第三土曜日札幌大和家美人寄席、毎月第一火曜日すすきのほま笑うまい寄席、毎月第四月曜日白石まちづくり寄席や琴似お元気寄席、円山寄席等の他、各種会社安全大会、総会等で講演多数あり。

私は現在、北海道を中心に落語を喋り、そして機会がある度に笑いの効用を聴衆者に伝えている、いわば北海道の落語家である。現在は笑生十八番という高座名を付けて依頼先に出向き、喋ったり(落語講演)、自らの落語会を開いたりしている。

私は昭和26年、島根の松江に生まれ、高校の時に落語研究会に所属して落語を喋り出したのが切っ掛けでその後の北海道大学在学時も落語研究会に入り落語口演に没頭した。

社会人になってからも個人的に落語口演活動を続けてきたが、実は四年前に、ある占い師から落語口演が生業に充分なると示唆されホームページを作成したところ、昨年は148件、一昨年は159件の依頼を頂いた。その中には北海道生産性本部様からの講演依頼も含まれている。

現在、私は落語会出演や笑いと健康に関する講演活動の他に札幌市内の寄席会場をお借りして月に一度落語教室を開講している。落語教室に来て頂いている生徒さんは現在10名でお寺の和尚さん、会社社長、税理士、講師、司会者、主婦、等などバラエティに富んでいる。生徒さん全員に共通しているのは、上手く喋りたいという目的に加えて、何か自分自身の気持ちのバランスを落語口演に求めているところではないかと思う。日常的に喋る機会があまり無い落語を喋ることが出来ることによって満足感が得られ、気持ちのバランス、安堵感を得ることにつながると思うからである。



落語講演会風景

ある建設関係の社長さんが、私の落語口演を聞いた翌日、落語教室の門を叩いてくれた。この方はいつもの社内朝礼で話を滑らせ、その後、出社拒否感を憶えて、ついにはパニック症候群と診断されたという。症状を改善するため努力し座禅会にも通ったそうだ。恐らく捨て鉢な気持ちで落語を選ばれたのかもしれないが、私はその社長さんだけを対象にした特別教室(全8回)を請け負った。私自身がパニック症候群経験者であり、その方の症状を改善できる自信と実績があったからである。

さて、1対1、マンツーマンの特別教室を始めたものの、当然、最初から喋られる筈はない。最初のうちは10分喋って20分休憩というパターンを繰り返した。ここで肝心なのが、休憩中の時間である。休憩中に、お茶を飲んだり食事をしたりしながら雑談の中でその社長さんの成功体験を探って行くのである。

幸運な事に、その成功体験は数多くあった。高校時代は野球選手、しかもピッチャー。5年前には詩今もしていた事が分かるや否や、詩今を吟じてみってもらったり、ピッチングフォームを披露してもらい、褒めるのである。これはマンツーマンでなければ出来ないことである。そしてその成功体験を披露してもらった直後に落語の一言を演じてもらう。自分の成功体験を話す時は、教えなくても、他人に頼まれなくても自然と大きな声で話そうとするし、話す意思は、非常に強くなる。その状況で落語を喋れば少しでも上手く喋ることができるのである。そして、それらを繰り返した結果、今ではその社長さんは数種の古典落語を憶え、数ヶ月に一度、私の落語会の高座に上がっていただくまでになっている。

私の落語教室の生徒さんの中には、この社長さんの他にも嬉しいことに函館や滝川、岩見沢など遠くから通っていただいている方もおり、それらの生徒さん達がそれぞれの地域で落語を喋ってくれている。

落語教室の生徒さんに落語を教えながら共に笑い、生徒さんは北海道各地で笑わせ役に回ってくれる。「笑って、笑わせて北海道を幸せの大地にしたい」という私の想いが私の活動を通じて徐々に広がっていく実感を日々味わわせていただいている。



落語教室風景